

NPO法人

全日本語りネットワーク



〒185-0021 東京都国分寺市南町 2-18-3

国分寺マンションB-03A

(FAX)0237-67-7001

(HP) <http://japankatarinet.jp/>

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(振替)00130-2-114808

2024. 7. 7 発行

ニュース

災害を伝える話を語り継ぐ

大平悦子（岩手県遠野市）

2024年9月9日～10日「第16回全日本語りの祭りin奈良」が開催されます。みなさまの語りを聴くこと、そして語りを聴いていただくことをとても楽しみにしています。

2024年元旦、新年を祝う食卓を囲み始めたその時、能登半島地震が発災しました。新年のお祝い気分は吹き飛びました。すぐに13年前の東日本大震災、8年前の熊本地震が頭をよぎりました。日本は、なんと災害の多い国でしょう！そんな日本ですから、意識してみると、ふだん何気得なく触れていた民話の中には、飢饉、水害、地震、津波、疫病など災害を伝える話がたくさんあることに気が付きました。

私は遠野市の出身で、現在遠野言葉で遠野の昔話や遠野物語を語っています。東日本大震災後は、意識して災害を伝える話を語っています。「へびのだいもじ」「郭公と時鳥」などは飢饉を伝える話、「母也明神（ぼなりみょうじん）」「横田流れのはなし」などは水害の話、「狼のはなし」「狼の巣から子狼を捕った話」などは野獣の害の話です。

災害の話の中でも、「妻のたましい」と「娘のしゃれこうべ」は、とりわけよく聴いていただいています。

「妻のたましい」は、遠野物語にたった一つある津波にまつわる話です。明治29年（1896年）の三陸大津波で妻を失った主人公が、1年後、霧の中を他の男性と一緒に歩く妻の幻を見るという話です。この話、私は始めのうちは、「恋しい妻にやっと会えたと思ったら、他の男性と一緒にいた」という主人公のやり切れない思いに共感しながら、語っていたような気がします。

でも何度も語るうちに、そして月日が経つうちに、主人公は妻の幻を見る必要があったのではないかと思うようになったのです。主人公の災害を乗り越えてなんとか前に進んでいこうとする気持ちが、自分の気持ちに区切りをつけるために、この幻を見たのではないかと思うようになりました。今はそんな思いで語っています。

「娘のしゃれこうべ」は、あるお爺さんが野原でしゃれこうべを見つけお酒と一緒に飲む。その後、娘が現れ、お爺さんを娘の家に連れて行ったことにより、娘の親たちが行方不明だった娘の遺骨を見つけるという話です。この話に初めて触れたとき、災害の話とは気が付きませんでした。面白い話ではあるけど、自分で語ろうとまでは思いませんでした。

でも震災後、被災された方々が、行方不明の家族をずっと捜し続ける姿を見て、「この話は行方不明だった娘と、娘を捜し続けてきた親の、深い思いのこもった話だった」と気が付きました。時代が違ってても人の思いは同じです。それが人の口から口へと伝えられ、今に伝わっているのではないかと思います。このことに気が付いた時、ぜひ語りたい、聴いていただきたいと思うようになったのです。

災害を伝える話は、決して楽しく笑える話ではありません。むしろ辛く悲しい気持ちになります。でも民話を後世に伝える語り部として、災害を忘れないためにも、語り継いでいかななくてはと思っています。「第16回全日本語りの祭りin奈良」でも災害を伝える話をプログラムに入れる予定です。能登半島地震の一日も早い復興を願うと共に、私たちみんなが関心を持ち続けていかななくてはいけないという思いからです。

私はこれまで、奈良の民話を語りつぐ会・御所おはなしの会・おはなしまめたろうの会などの方々へ度々ご縁をいただき、お世話になってきました。皆さま、地域に伝わる民話を後世に伝えようと、日々研鑽を重ねながらとても熱心に活動されていて、私も大いに刺激を受けました。そんな奈良での語りの祭り。お世話になった方々や、これまでの語りの祭りを通して知り合った方々に、またお会いできるのが楽しみです。そして奈良はもちろん、さまざまな地域の方々の語りを聴けること、今からワクワクしています。

みなさま、9月、奈良でお会いしましょう。